

やまなし 医療最前線

県立中央病院から

《 39 》

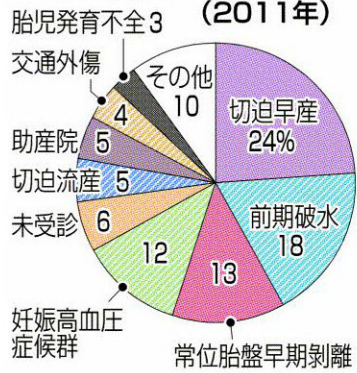
山梨県内の分娩数は年間約6300件。県内唯一の総合周産期母子医療センターを備える県立中央病院は、この1割を担うとともに、母体救急搬送される約150件のうち7割を受け入れる。ハイリスク妊婦や新生児を守る使命のもと、細菌性膣症の治療や胎盤内の血流測定といった独自の研究に取り組んでいる。

同センター母性科科長の永井聖一郎医師によると、母体搬送の理由は切迫早産と前期破水が約半数を占める。ともに早産の危険性があり、一度経験すると次のお産でも繰り返す可能性が高い。同センターは早産を防ぐ取り組み



永井聖一郎
母性科科長

県立中央病院への母体搬送の主な理由 (2011年)



独自の治療で早産防ぐ

みとして、その原因の一つとみられる細菌性膣症の治療を積極的に進めている。細菌性膣症は膣内の常在菌である乳酸菌が減り、ほかの細菌やクラミジア、マイコプラズマ、ウレアプラズマなどが増えた状態。国内ではマイコプラズマやウレアプラズマを積極的に検査する産科施設は限られているのが現状だ。

また妊娠高血圧症候群や胎児発育不全に対応するため、胎盤の血流を測定し胎盤の機能を評価する方法を研究。胎盤は胎児に酸素や栄養を送る重要な役目を果たすため、血流が低下し機能が衰えてきた場合は、早めの出産が必要になる。永井医師は「胎児をより良い状態で体外に出すタイミングを見極める指標の一つになる」と話す。

一方、胎児の染色体検査を希望する人が増えていることから、必要に応じてスクリーニング検査を実施している。国内でも数十人と少ない専門医が、胎児の首の後ろに見られることのあるむくみについて、病的なものかどうかを総合的に評価。安全性の高いスクリーニング検査で母親の不安を取り除き、母子へのリスクを伴う羊水検査を避けることができるという。

永井医師は「ハイリスク妊婦ケアが同センターの大きな役割。研究を重ね、安全に産める環境を提供していきたい」と話している。

Ⅱ第2、4木曜日に掲載します